

村岡花子 年表

- 1893年 (明治26年) ▶ 6月21日、甲府市で安中逸平、母てつつの長女として生まれる。本名はな
- 1903年 (明治36年) ▶ 東洋英和女学校予科1年に給費生として編入学。寄宿舎生活を始める
- 14年 (大正3年) ▶ 山梨英和女学校に英語教師として赴任
- 17年 (大正6年) ▶ 初めての作品集「爐邊」を出版
- 19年 (大正8年) ▶ 山梨英和女学校を退職。上京して日本基督教興文協会に勤める。10月に村岡徹三と結婚
- 26年 (大正15年) ▶ 長男道雄が疫痢で死亡
- 27年 (昭和2年) ▶ マーク・トウェイン作「王子と乞食」を翻訳出版
- 32年 (昭和7年) ▶ NHKの前身JOAKで子ども向けニュースを担当。「ラジオのおばさん」として親しまれる
- 52年 (昭和27年) ▶ 5月に「赤毛のアン」を刊行。夏に日本初の家庭図書館「道雄文庫ライブラリー」を自宅に開設
- 55年 (昭和30年) ▶ ヘレン・ケラー来日時に通訳を務める
- 68年 (昭和43年) ▶ 10月25日、75歳で死去

山梨英和時代 人生の礎に

〈薄紫のブドウにはさまざまの若い歲月の思い出がこもっている。今になってこれを味わうと、遠く過ぎさった若い日の喜びや悲しみがまざまざとよみがえってくる。それらの思い出は主として甲州につながっている。結婚前の若い歲月を女学校教師として過ごしたのが甲府で、いわばわたしの青春は甲府につながるといってもいいだろう。そしてそれと一緒に紫のブドウが必ず浮かんでくる〉(村岡花子「ぶどうの房」より)

花子は東洋英和女学校高等科を卒業後の1914年、山梨英和女学校に赴任した。幼い頃に上京した花子にとって、山梨英和で過ごした時間を通じて甲府は故郷になった。生徒と寄宿舎で寝食を共にし、教え子たちに聖書の話や自作の話語り聞かせた。当時の生徒の一人は、同窓通信にこんな思い出を寄せている。「日曜日には教会問答を暗記させられる。担当は、安中(村岡)先生だ」(敬称略)

現在、山梨英和中・高の校内には、花子の生涯を紹介するパネルや資料が展示され、足跡を伝えている。深沢は言う。「生徒たちに、いくつもの曲がり角があっても一筋の道を歩んだ花子を誇りに思ってもらいたい」

週末は生徒の家に招かれ、ブドウ狩りを楽しみ、大家族と炉端でほろりとも味わった花子。在任中に出版した初めての作品集「爐邊」には、山梨での温かな思い出が込められている。

山梨英和学院史料室長の深沢美恵子は「山梨英和時代が花子の人生の礎になった」ととらえる。再び上京し多忙になってからも、同窓会にはたびたび足を運んでいた。

校内に設けられた村岡花子を紹介する展示コーナー。生徒たちが足跡をたどる場になっている

山梨英和中・高



〈敬称略〉
杉原みずき

次回5月中旬に掲載予定です。